

## 子どもの遊びの実態に関する研究

### A Study of Actual Conditions of Children's Play

鶴山博之

TSURUYAMA Hiroyuki

橋爪和夫<sup>1)</sup>

HASHIZUME Kazuo

中野綾<sup>2)</sup>

NAKANO Aya

#### I. 緒言

子どもは遊びを経験することによってさまざまなことを学習していくといわれている。子どもは多様な遊びの中で、楽しさ、不思議さ、面白さに裏打ちされて、人や物や自然と関わりあいながら、それまでにはない新しい世界を創造していきたいという子どもの内的欲求を満たしてきた(山本 2007)。仙田(2002)は遊びが子どもにもたらすものとして、大きく分けて「創造性」「社会性」「感性」「身体性」の4つの能力の開発を挙げている。また運動能力については1歳以降、就学するまでの間に子どもたちは日常生活に必要なさまざまな基本動作を習得し、この基本動作を十分身につけた上で、小学校低・中学年でこれらの動作を組み合わせ、遊びやスポーツの中で実践していく(川辺 2005)とされている。さらに子どもは、他人との関わりや共同経験を通じて、人とともに社会の中で生きていくうえで必要な知識や行動、すなわち社会性を身につけていく(三木、2002)。

社会の変化に伴い、子どもを取り巻く環境は大きく変化している。都市化に伴う自然や遊び場の減少、少子化に伴う兄弟・友達の減少、学習塾へ通う子どもの増加などもその例であろう。また科学技術の発達に伴い、ゲーム、パソコンなど遊びの内容も大きく変化している。つまり子どもたちは彼らの保護者の子ども時代に比べ、外で、大勢の友達と遊びたくても遊べない環境に置かれているのではないかと考えられる。また体力の面からしても、文部科学省の体力・運動能力調査報告書(平成10年10月発行)によれば「昭和39年(1964)年の開始年度から昭和50年(1975年)ごろまでは向上傾向が顕著であったが、昭和60年(1985年)ごろまでは停滞傾向が続き、それ以後今日に至るまで程度の差はあるが、ほとんどの年齢の段階で体力・運動能力ともに低下傾向にある」ことが示されている。平成18年度の文部科学省の体力・運動能力調査報告書においても同じ傾向が報告されている(文部科学省、2006)。

体力低下の背景には、生活環境やライフスタイルの変化が影響していると思われる。遊ぶ場所も、機会も、相手も極端に少なくなっている中で、健やかな育ちを実現させることは困難な状況になっている(井上、2000)ことは事実であろう。

中村(1999)は、「子どもたちが、楽しく遊ぶためには「遊び時間」「遊び空間」「遊び仲間」という「3つの間」の条件が重要である。すなわち遊ぶためにたっぷり時間をとれること、遊ぶ場所を自由に選べること、そしてその遊びを一緒に楽しめるさまざまな仲間が存在することである。」と述べている。

現在の子どもの遊びに関して、子どもの遊びに必要な自由に遊べる屋外の「空間」と「時間」、そして一緒に

遊ぶ「仲間」の「3つの間」がなくなったといわれている。本研究の目的は、現在の子どもたちの「空間」「時間」、「仲間」の「3つの間」について明らかにすること、また遊びが変わってきたことによって子どもたちに生じている問題点を明らかにすることである。

## II. 研究方法

本研究の調査は富山県内の5つの剣道教室に通う児童85名(男子66名、女子19名)および4つの小学校に通う児童337名(男子164名、女子173名)を対象として行った。さらに児童の保護者128名に対しても行った。調査の方法はアンケート用紙により行い、調査期間は2005年10月～11月であった。

本研究は「わが国の文教政策(1984)」、「日本の青少年の生活と意識(1997)」、「低年齢少年の価値観等に関する調査(2000)」を参考に遊びに関する質問項目を作成した。調査内容は①遊びの内容に関するもの、②生活習慣、時間、集団、遊び場、運動、欲求、遊びに関する意識、学校に関するものであった。また保護者については、「子どもの遊びについての想い」であった。

## III. 結果と考察

表1は子どもたちの現在行っている遊び、表2は今一番好きな遊びについてあらわしたものである。「現在行っている遊び」、「今一番好きな遊び」のどちらもゲームが最も多く、現代の子どもたちの遊びの特徴を端的に表しているといえる。ゲームを行っている子どもたちの割合は、ゲーム内容に変化があるにしても馬場の報告(1999)とほ

表1 現在行っている遊び

	N	%
ゲーム	54	40.6
ボール遊び	24	18.0
季節に応じた遊び	21	15.8
話をしている	16	12.0

N=133

表2 今、一番好きな遊び

	N	%
ゲーム、パソコン	51	38.3
外遊び	49	36.8
ボール遊び	29	21.8
カードゲーム	17	12.8
なわとび	16	12.0

N=133

とんど変わっていない。また「現在行っている遊び」についてはボール遊びが、「今一番好きな遊び」については外遊びがゲームに次いで多く、ゲームと同じくらい子どもたちに好まれていることが認められる。

表3,4は子どもたちにとっての学校における「遊び時間」である休み時間、放課後の過ごし方について表したものである。休み時間については、「話をしている」が最も多いものの、「なわとび」「ボール遊び」「鬼ごっこ」が上位を占め、身体活動的な遊びを多く行っていることがうかがわれる。しかし、放課後では「ゲーム」「習い事」「テレビ、DVD」が多くを占め、放課後では身体運動的活動は少ないと思われる。

表3 休み時間の過ごし方

	N	%
話をしている	33	24.8
なわとび	27	20.3
ボール遊び	15	11.3
読書	12	9.0
鬼ごっこ	10	7.5

N=133

表4 放課後の過ごし方

	N	%
ゲーム、パソコン	37	27.8
習い事	31	23.3
テレビ、DVDを見る	31	23.3
勉強	19	14.3
本(漫画)を読む	10	7.5

N=133

表5は遊び時間を平日、土曜日、日曜日ごと

に比較したものである。平日については30%近くが1時間以下と、塾や習い事で忙しい現代の子どもたちの実態を表しているといえる。しかし、土曜日、日曜日については3時間以上と答えた子どもたちも多く、平日の遊びは学校の休み時間中心で、土曜、日曜日にはたっぷり時間をとって遊ぶという実態が浮き彫りにされた。

現代の子どもたちは学習塾や各種習い事などを行っているケースが多く、本研究においても習い事を行っている子どもたちは85.8%に達し、しかも週2~4回通っている子どもが多いことが認められ、放課後も忙しい子どもたちの様子が明らかになった。しかし、このような状況でも「毎日遊ぶ」子どもたちが半数以上を占め、また「週1~2日遊ばない日がある」子どもたちを含めると、ほとんどの子どもたちが、何らかの遊びを毎日行っていることが認められた。

表6は子どもたちが一緒に遊ぶ人数を示したものである。さすがに一人で遊ぶ子どもはごく少数であったが、1~3人で遊ぶ子どもたちが半数以上を占め、7人以上の集団で遊ぶ子どもは10.8%と少数であった。また一緒に遊ぶ対象も同学年が圧倒的に多く、他学年の子どもと遊ぶ子どもは11.8%にとどまっていた。つまり現代の子どもたちは少子化の影響で兄弟が少ないこともあり、1~3名の同学年の子どもと遊ぶということが明らかとなった。

表7は外遊びをする子どもとそうでない子どもの一緒に遊ぶ人数の関係を示したものである。外遊びをする子はそうでない子どもに比べ、多人数で遊ぶ傾向が認められた。深谷(1999)は「遊び仲間には地域や時代を超えて「何人かの子どもが集まり屋外で体を動かしながら自発的に遊ぶ」という共通性があった。」とし、渋谷(2004)は「仲間と群れて遊ぶことは子どもが対人間関係能力を養ううえで重要な役割を果たしてきたのであるが、遊びの中で群れることを経験していない今の子どもたちは、対人間関係能力を養う絶好の機会を逸しているといえる。」としている。また馬場

(1999)は「現代の子どもたちの遊びの問題点は集団遊びの減少である。子どもは集団で遊ぶ中でルールを守る精神や協調性、忍耐力を身につけていく。また異年齢集団の消滅によって、遊ぶ方法やルールはもとより、遊び場、文化の伝承もなされていない。かつてはこの集団で、年少の弱者への思いやり、あるいは年長のものに対する憧れ、尊敬の気持ちも育っていった。」など、子どもたちが群れて遊ぶことの重要性を指摘している。子どもたちが遊びを通して「社会性」を身につけていくという観点からも、「室内でのゲーム遊び」よりも「外遊び」をするような動機づけ、環境整備が必要と思われる。

表. 5 曜日による遊び時間の比較

	1時間以下	1~3時間	3時間以上
平日	80(28.2%)	149(52.5%)	55(19.4%)
土曜日	42(14.8%)	132(46.5%)	110(38.7%)
日曜日	48(17.1%)	124(44.1%)	109(38.8%)

$X^2=38.73$  DF=4 P<0.001

表. 6 一緒に遊ぶ友達の数

	N	%
一人遊び	4	1.4
1~3人	156	54.5
4~6人	95	33.2
7人以上	31	10.8

N=286

表. 7 外遊びと遊ぶ人数との関係

	0~3人で遊ぶ	4人以上で遊ぶ
室外で遊ばない	75(63.6%)	43(36.4%)
室外で遊ぶ	81(50.0%)	81(50.0%)

$X^2=6.67$  DF=1 P<0.001

表 8. は家の近くで遊ぶ理由を示している。小学生は大人に比べ活動範囲が制限され、遊ぶ地域も学校・自宅周辺に限定されてしまうと思われる。これらを見ても、特に家の近くで遊びたい理由は見当たらず、「ただなんとなく近所で遊ぶ」といった感じが強い。一方、家の近くで遊ばない理由は、遊び道具が無い(公園等)、楽しいあそびができない、といったものが上位であり、現代の子どもたちにとって遊びに適した「空間」が近所に存在しないと考えられる。これらのことから、子どもたちが外で遊びたいと思うような施設・設備の充実が必要であると考えられる。

表 9 は「運動が好きか」についてと「外遊びが好きか」との関係について表したものである。子どもたちは外で遊ぶことが大好きである。また運動することも大好きである。つまり子どもたちは本質的に運動が好きであり、外で遊びたいという欲求を持っている。また「運動が好き」な子は「外遊びが好き」ということも明らかになった。それにもかかわらず多くの子どもたちが室内でのゲーム遊びなどを行っていることは、家の近くに楽しく外遊びをするのに適した場所が存在しないためと考えられる。また表 7 に見られるように、外遊びをする子どもは半数が 4 人以上で遊んでいる。外で行う鬼ごっこ、ボール遊びなどはある程度的人数がいないと楽しく行うことはできない。少子化、習い事などによって外で楽しく遊ぶための人数が確保しにくいことも、外遊びをあまりしない原因として考えられよう。

表 10 はテレビの視聴時間と就寝時間の関係を表したものである。テレビ・DVDを見ることは子どもたちにとって遊びの大きな要素であり、かなり長い時間をテレビ・DVDの視聴に費やしている。最近、夜更かしをする子どもが増えているといわれているが、今回の調査でも 10 時以降に就寝する子どもたちは 50% 近くに達していることが明らかとなった。夜更かしする理由として、勉強や習い事などのためとも考えられるが、今回のテレビ視聴時間との関係から、テレビを長く見ている子供たちは就寝する時間も遅いことが明らかとなった。

表 11、12 は遊びに対する保護者の思いである。ほとんどの保護者は子どもたちが成長していく上で、遊びを通していろいろなことを学ぶことができ、遊ぶことは大切だと思っている。

一方、子どもの遊びについての心配な点で、「危険(34%)」「怪我(26%)」

に次いで「外で遊ぶことが減っている(23%)」であった。保護者の子どもに比べ、外で遊ぶことについての危険性が増していると考えている一方で、外で遊ぶことが明らかに減っていることを実感し、外で遊ぶこと、集団で遊ぶことの大切さを保護者自身思っていると考えられる。

表. 8 家の近くで遊ぶ理由

	N	%
広いから	9	15.0
家の近くにあるから	7	11.7
楽しいから	6	10.0
雪が積もっているから	4	6.7
いろいろな遊びができるから	4	6.7
兄弟や友達と遊べる	4	6.7

N=60

表. 9 外遊びと運動好きとの関係

	好き	まあ好き	嫌い
運動は大好き	143	29	2
運動はまあ好き	40	56	3
運動は嫌い	1	5	3
運動は大嫌い	1	1	1

$X^2=91.55$  DF=6 P<0.001

表. 10 テレビ視聴と就寝時間の関係

	3 時間以内	3 時間以上
10 時までに就寝	127	11
10 時以降に就寝	111	35

$X^2=16.20$  DF=1 P<0.001

表. 11 遊びを通して学ぶことができるか

	N	%
とても思う	93	72.1
まあ思う	34	26.4
あまり思わない	2	1.6

N=129

表. 12 遊ぶことは大切か

	N	%
とても思う	126	96.2
まあ思う	5	3.8

N=131

#### IV.まとめ

子どもたちにとって遊ぶことは楽しいことである。今回の調査でもほぼ 100%の子どもたちが「遊んでいて楽しい」と答え、さらにほとんどの子どもが「もっと遊んでいたい」とも答えている。しかし、平日の遊びのほとんどは学校の休み時間によるもので、塾通いや習い事が多くなった結果、放課後に遊ぶための時間的余裕の無いことが明らかとなった。

都市化に伴い、かつて子どもたちが外遊びを行っていた田畑、公園、河川、広場などが減少し、また現存する公園や広場についても、施設・設備、広さなどの点からも、子どもたちが十分満足して遊べる空間とはなっていない。また交通事情の変化等、子どもたちを取り巻く社会状況が大きく変化しており、安全に遊べる空間の減少は明らかである。

現在の子どもたちの好む遊びはゲームが最も多いが、外遊びも好むことが明らかになったように、子どもたちは潜在的に外で遊びたい欲求を持っていると考えられる。しかし、遊びの空間の減少に加えて時間的余裕の無さ、少子化による兄弟、友達の減少なども重なって、外遊びの機会が減少しつつあると考えられる。

社会環境の変化に伴う、子どもたち遊び方の変容はこのままの状態ではばく推移しそうである。今後も外遊びの減少により、遊びの中で身につけていくとされている基本的運動能力の発達に危惧を抱かざるを得ない。それだけに、幼稚園・小学校段階で教科としての体育の充実はもちろんのこと、子どもたちが学校にいる時間帯に、身体運動を含む外遊びがもっとできる機会を作るような対策が必要である。

1)富山大学人間発達科学部

2)富山大学人間発達科学部附属特別支援学校

#### 引用・参考文献

- 朝日新聞 遊び場の約8割に危ない遊具・設備. 2006.2.1
- 馬場桂一郎(1999)今、子どもたちの遊びは. 体育科教育 47(16):13-16
- 深谷昌志(1999)子どもは遊びを通しておとなになる. 体育科教育 47(16):10-12
- 井上真理子(2000)最近気になっていること. 体育科教育 48(14):10-13
- 川辺章子(2005)動作習熟のためのからだの発達. 体育の科学 55:496-501
- 三木ひろみ(2002)学習主体について知る. 体育科教育学入門. 大修館:30-38
- 文部省(1984)我が国の文教政策. 大蔵省印刷局, 18
- 文部省(1998)体力・運動能力調査報告書. 文部省体育局
- 文部科学省(2006)体力・運動能力調査報告書. 文部科学省体育局
- 内閣府国立印刷局(1997)日本の青少年の生活と意識
- 中村和彦(1999)子どもの遊びの変貌. 体育の科学 49:25-27
- 斉藤良輔(1988)子どもの遊び・スポーツの未来学. 体育科教育 36(4):21-24
- 仙田 満(2002)こどもにとって楽しいが香生活を. 体育科教育 50(4):32-36
- 渋谷崇行(2004)身体運動はコミュニケーションスキルを高めるか. 体育科教育 52(5):18-21
- 染谷久雄・森楸(1996)遊びの教育的役割. 黎明書房, 67.
- 総務省青少年対策本部(2000)低年齢少年の価値観等に関する調査.
- 山本清洋(2007)幼少年期の遊び・スポーツの現在. 体育科教育 55(10):10-13